

テキスト ルカによる福音書10章25～37節

ルカによる福音書では、この「善いサマリア人」の喩えに続いて、「マルタとマリア」の物語が始まります。この流れを、「隣人を愛すること」と「神様を愛すること」の対比と見ることも可能です(27節)。つまり、私たちの助けを必要としている隣人を助けることで示す愛と、私たちが足もとに座って御言葉を聞くことをもって示す愛との対比です。静と動の両者の愛が、永遠の命に至る道筋となっています。

「善いサマリア人」は喩えという文学ジャンルに属しています。物語の細部に意味を持たせて理解するより、全体から一つのメッセージを聞き取るべきです。全体が語っていることは、隣人愛とは何かです。また、喩えを解く鍵の言葉は、「それを実行しなさい」(28節)と「あなたも同じようにしなさい」(37節)の繰り返しにあります。隣人愛とは何かを知っているという認識のレベルで留まっていることはできません。隣人愛の実践が中心テーマです。行いが問われています。ここに、イエス様の御言葉を聴く厳しさがありません。自分の実践を顧みることなしに、イエス様に近づくことはできません。

イエス様が、この喩え話を語ることによって言おうとされたことは、律法学者の自己正当化を打ち砕くことです。彼は、永遠の命を受け継ぐためには神様への愛と隣人愛とが必要なことを知っています(27節)。イエス様が、知っているだけでは駄目で、「行いなさい」(28節)と最初の実践命令を語られたとき、彼は「隣人とは誰ですか」という問いによって自分を正当化しようとした(29節)。彼は、隣人愛の実践でも自信があったのでしょう。もし、イエス様が、「隣人とは同胞のユダヤ人です」とお答えになられたなら、「私は、同胞の民族の悲惨を憂い、これほどの犠牲を払って愛しています」と語り始めていたかもしれません。しかし、イエス様は、彼に「善きサマリア人」の喩えを語ることによって、隣人愛の欠如を認めざるを得ない地点まで彼を追い込みました。

イエス様の鋭さは、ユダヤ人律法学者に、隣人愛の模範者としてサマリア人を提示したことにあります。それも、ユダヤ人の祭司もレビ人も行うことができなかったことを、サマリア人が行っています。そして、彼が助けたのは、エルサレムからエリコの町に至る途上であることを覚えるなら、おそらくユダヤ人です。ユダヤ人の宗教的指導者が同胞の苦境を知りつつ通り過ぎるなかで、サマリア人が自己犠牲を払ってユダヤ人を助けています。イエス様は、これと同じ実践をユダヤ人律法学者に求めました。彼は、サマリア人の苦境を見たならば、自己犠牲を払ってサマリア人を助けるという隣人愛の実践へと進まねばなりません。これをせずして、自分は隣人愛の戒めを守っているという自己正当化に留まることはできません。

この喩えを理解するには、当時のユダヤ人とサマリア人との対立を念頭に置くことが必要です。ユダヤ人はサマリア人を蔑視しています。そのサマリア人がユダヤ人の宗教的指導者に見捨てられたユダヤ人を助けています。隣人愛とは、民族的垣根を越えるものです。「その人を見て憐れに思い」(33節)という心の震動が、民族の違いやあらゆる違いを超えさせる力となって、助けを必要としている人の傍らに、自らを立たせます。イエス様の問いかけは、この心を持っているかです。この心がないなら、ユダヤ人であることも、祭司やレビであることも、自らの誇りとはなりません。

当時の社会的文脈を覚えるとき、この喩えは革命的とも言える新しさもっています。そのことに驚くなかで、私たちの関心は、喩えを超えて、喩えを語られたイエス様ご自身に向かいます。これだけの実践を要求できるイエス様とは誰なのか。また、イエス様ご自身の隣人愛とは何か、つまり十字架の愛に、思いが向かいます。その時、私たちは深い悔い改めをもって、イエス様の足もとで御言葉を聴く弟子になるように導かれます。

(岩崎 謙)

テキスト ルカによる福音書10章25～37節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問4

### 〔単元のねらい〕

善きサマリア人のたとえから、私たちのために命を捨ててくださった主イエスの愛を見つめたい。このテキストから隣人愛を学ぶことにとどまらず、むしろそのようにして律法主義的倫理教育に陥ってしまわぬように注意して、徹底的にキリストの福音を語るように心がけたい。そのようなキリストへの集中だけが、その危険を回避するだろう。そして子どもたちと共に、キリストの愛に促され、それぞれの隣人のもとに派遣されたい。

## 「あなたの隣人は誰ですか？」

もうすぐ学年が終わりますね。この一年で、皆さんもたくさん友だちが出来たでしょうか。子どものころ「本当の友だちは自分が困っている時にも離れずにいてくれて手を差し伸べてくれる人だ。そういう友だちができるといいね、そしてまず自分がそういう友だちになってあげなさい」と、学校の先生から言われたことをよく覚えています。例えば、誰かが教室でいじめられて、力の強いいじめっ子の方にみんながついたとしても、いじめられている子のために最後までそばにいたのが本当の友だちだと言えるかもしれません。そんな友だちが一人でもいれば、その人は本当に幸せですね。それだけで生きていく力がわいてきます。勇気がわいてきます。私たちにはそういう友だちがいるでしょうか。今日はそんなことを考えながら神様のお言葉に聞きたいと思います。

イエス様は、聖書の学者さんからこういう質問を受けました。「先生、何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるのでしょうか？」イエス様を試して、何かおかしなことを言ったらおとしめてやろうとたくらんでいたのです。でもイエス様は平気で答えられました「それはあなたも知っているでしょう、聖書の先生なのだから。聖書に何と書いてあるか、あなたの考えを言ってみてください。」ムムっとしたかもしれませんが、学者さんはこう答えました。「神様を愛することと、私の

隣人を自分のように愛することです。」それを聞いてイエス様は言われました。「そうです、それが正しい答えです。分かっているではないですか。ではその通りに行えばよい。大事なのはそれを実行することです。そうすれば永遠の命を得られますよ。」これを聞いて学者さんは腹を立てました。あなたは頭ではそれを知っていても、実行できていないと責められたように思ったからです。でも彼は、自分は家族や友だちのことをちゃんと愛していると思っていました。そしてそうやって、愛して当たり前の人を愛することで、十分に「隣人を愛している」ことになると思っていたのです。だからイエス様に「では隣人とは誰のことを言うのですか？」と問い返します。

イエス様は答えられました。「ある人が旅行をしていました。エルサレムから自分の村のエリコに帰っていく道の途中で追いはぎに襲われて、着ている服をはぎ取られて、血まみれになるまで殴られて、死んだようになってしまいました。そこへまずこの人と同じユダヤ人で、神殿で働く祭司が通りかかりました。でもその人を見ると逃げるようにして道の向こう側を通っていきました。次にレビ人が来ました。この人もユダヤ人です、仲間のはずですが。でも同じようにさっさと行ってしまいました。こうして二人の間に見捨てられたのです。でもそこに一人のサマリア人が通りかかりました。彼は血だらけのその人を見ると憐れに

思い、近寄って怪我の手当てをしてくれて、自分のろばにのせて、宿屋に連れて行って介抱してくれました。でもお世話をしてもらいながら、その人は不思議でなりませんでした。どうしてこのサマリア人は、ユダヤ人のわたしを介抱してくれるのだろう。いつも私たちはサマリア人のことを馬鹿にして、差別してきたのに。あいつらと友だちになってはいけないと……。でもサマリア人のその人はそんなこと気にもしていないように、懸命に介抱してくれました。そして翌日になると宿屋の主人にお金を払って、『私はもう行かなければなりません、この人を介抱してあげてください。お金が足りなければ、後でまた払いますから』と言って出発していきました。』

このようにお話になった後で、イエス様は学者さんに問いました。「この三人の中で誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思いますか？」学者さんは、決まりが悪そうに答えました。「……助けてあげたサマリア人です。」そこでイエス様は言われました「行きなさい、あなたも同じようにしなさい。」

このイエス様のお話をどう思いますか。最後のイエス様の質問に皆さんならどう答えますか。この質問はこういう風に言い換えることもできるでしょう、「この三人の中で誰が襲われた人の“本当の友だち”になったと思いますか？」その答えは、皆さんにもよく分かっていると思います。

こういう友だちになることができるでしょうか。先生は「できません」と言うしかありません。皆さんはどうでしょう？ 隣人になるとは、このサマリア人のように、その人が本当に苦しい時にそばに居続ける本当の友だちになるということです。自分のお金や時間を捨ててまで、このサマリア人は襲われた人の本当の友だちであろうとしました。私たちはなかなかそのように人を愛することが出来ません。そういう自分の愛の貧しさや、弱さ、勇気のなさを悲しく思います。それは私

ちの“罪”なのです。罪人である私たちは、どうしても他人より自分を大切にしてしまう。

では私たちは永遠の命を受け継ぐことができないのでしょうか。私たちの罪を見続けるならば、そうなります。でもイエス様を見上げるならば、答えは変わります。私たちがすべきことは、自分の弱さにため息をつくことではなくて、私たちのために本当の友だちになってくださったイエス様のことだけを考えることです。サマリア人は襲われた人のために自分のお金や時間を捨てましたが、イエス様は私たちのために命を捨ててくださいました。それは私たちのことを愛してくださったからです。「友のために自分の命を捨てること。これ以上に大きな愛はない。(ヨハネ15:13)」とイエス様は言われましたが、私たちの友となるために、その言葉どおりに十字架で死んでくださり、神様の怒りを私たちの身代わりに受けてくださったのがイエス様です。

イエス様はそのようにして、御自分を愛するよりもさらに大きな愛で、私たちを愛して愛しぬこうとしてくださいました。イエス様のことを友だちにしたい人たちのために、そのようにしてくださったのです。今日のお話のサマリア人が、自分を馬鹿にして嫌っていたユダヤ人を助けたように、イエス様は、自分に唾を吐きかけ、十字架にかけて汚い言葉を浴びせた人間たちのために、私たちのために、自分の命を捨てて、本当の友だちになってくださいました。

私たちはこのイエス様を信じることで、罪赦され、永遠の命を受け継ぐことができます。このイエス様が、どんな時も、私たちの本当の友だちでいてくれます。だから私たちは、たとえ世界中の人から見捨てられても、一人ではありません。私たちが本当に苦しい時こそ、イエス様はそばにいてくださいます。そのイエス様が命じられます。「行きなさい。そしてあなたも同じようにしなさい。」 私たちも誰かの隣人になることができますように、一緒に祈りましょう。(坂井孝宏)

---

【今週の暗唱聖句】 ヨハネの手紙 一 3章16節

イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。

そのことによって、わたしたちは愛を知りました。

だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。

---

## 〈ねらい〉

主イエスは私たちのために御自分の命を捨てて十字架にかかって下さった。この主イエスがどんな時も私たちの本当の友達でいてくださる。私たちも隣人が本当にこまっているときに助けてあげられる人になろう。

## 〈展開例〉

みなさんは普段はあまり仲がよくないお友達があつても困っているときに助けてあげられますか？

イエス様はあるときこんなお話をされました。

あるひとりのユダヤ人がエルサレムエリコへ旅行をしている途中で強盗におそわれてしまいました。お金だけでなく洋服も盗られ、自分で動けないくらいひどいけがもしてしまいました。そこへ神殿で働く祭司が通りかかりました。でもひどい怪我をしている人を見て、何も助けないで行ってしまいました。次に通ったのは神様の御用をするレビ人でした。この人も祭司と同じように何も助けてあげようとしなくて行ってしまいました。最後にやって来たのはユダヤ人と仲の悪いサマリア人でした。このサマリア人は動けないでいるユダヤ人を見てかわいそうに思い、そばに来て傷の手当てをし、自分のロバに乗せてやどやに連れて行きました。次の日になるとやどやの主人にお金をわたして、けがをしたユダヤ人の手当てをしてくれるように頼みました。

祭司もレビ人も神様にお仕えする人ですし同じ

ユダヤ人なのに、傷ついて困っている人をほったらかしにしてしまいました。サマリア人はそのころユダヤ人ととっても仲が悪かったのに、自分のお金や時間を捨ててまで傷ついたユダヤ人を助けてあげました。さあ、この三人の中で傷ついたユダヤ人の本当のお友達は誰でしょう？ 普段はとっても仲が悪くても、困ったときに助けてくれたサマリア人ですね。私たちはこのサマリア人のように、誰かの本当のお友達になれるでしょうか。自分がそんをしてまで、というのはむずかしいですね。

イエス様は十字架にかかった時に、自分を十字架にかけた人たち、私たちもその一人だけれど、その人たちのために「どうぞ彼らを許してあげてください」と父なる神様にお祈りしました。ご自分の命を捨てて、私たち一人一人のために十字架にかかって下さったのですね。そのイエス様がどんな時でも友達でいてくださいます。私たちもこのイエス様を見上げるとき、心の中に愛が生まれて、周りの人が困っているときに、心から助けてあげられると思います

## 〈おいのり〉

神様、イエス様が私たちの身代わりとなって十字架にかかって下さりありがとうございます。私たちもイエス様が愛してくださったように、周りの人を愛することが出来るようにしてください。



「行って、あなたも同じようにしなさい。」

## 〈ねらい〉

となり人とは何か、譬えなどを用いて集中的に学びたい。発展的に、隣人とはとなりに座っている人、隣の家、隣の学校、隣の国……。神を喜び、愛と平和をもたらす源流がこの隣人愛であることを具体的に結び合わせて理解していきたい。

## 〈展開例〉

ある法律や聖書に詳しい人がイエスさまをちょっと困らせようと色々考えていました。そこで、質問をしました。「先生、何をしたら永遠の命をいただくことができますか？」

そこでイエスさまは言いました。

「律法、聖書にはなんて書いてありますか？  
あなたはそれをどうやって理解していますか？」  
『心を尽くし精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい。』と聖書に書いてあります。」

イエスさまは、

「正しい答えですね。では、あなたが隣人になりなさい。そうすれば永遠の命がいただけます。」

聖書に詳しい先生は、自分はそんなことづくりに実行していると思って、イエスさまに更に言い寄りました。神様の言葉をちゃんと心で聞いてそれを実行できる人、その人が永遠の命をいただくことができるんですが、この人は実行していませんでした。

この後に出てくるイエスさまのお話で、怖い人に襲われてしまった人が道ばたに倒れている人の話を聞きました。倒れている人を無視する人、知らんぷりして通り過ぎてしまう人は、永遠の命をいただくことができません。それはその人の隣人になっていないからです。困った人のことを助けてあげられる人、自分のように隣の人を愛することができる人、そのような隣人になりなさい、とされました。頭で「分かった！」とだけ思わないで、それをちゃんと行いなさい、とされました。

## 〈ワーク〉

1. 聖書に詳しい人はどうしてイエスさまを困らせようとしたのでしょうか。  
→自分が誰よりも聖書に詳しく、自信があったから。また、自慢することで自尊心を高めようとする、誰にでもある罪として理解したい。しかし神様の前では全く太刀打ちできない。
2. 旧約聖書にある「心を尽くし精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい」（申命記6：5）を開いてみよう。
3. 「隣人を自分のように愛しなさい。」も旧約聖書です。レビ記19：18を開いてみよう。
4. 今、となりにいる人が病気で困っていたとします。あなたはどうやって助けてあげますか？話し合ってみよう。  
→自分のように気遣い、神様に祈る。そのことが隣人愛に繋がることを子供と共に理解していきたい。

## 〈おいのり〉

神様、私たちはつい自分のことばかり考えてしまいます。神様、どうか自分のように隣人も助けられますように。そして永遠の命を受け継ぐ者となりますように。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



## 〈ねらい〉

隣人を愛するとは？

## 〈展開例〉

## 1. 隣人とは誰ですか

イエス様は「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と尋ねた学者に、「隣人を自分のように愛しなさい」といわれました。（ここでいう学者とは律法学者のことで神様の掟を詳しく研究し、指導する人です）

するとこの学者は、心の中でこう思いました。「私は家族を愛している。仲間のユダヤ人も愛している」。それで、自分の正しさを示そうとしていました。「では、わたしの隣人とはだれですか」。そこでイエス様は、ひとつの物語をもって答えられました。

## 2. 誰が隣人になったのか

祭司・レビ人

・襲われた旅人と同じ信仰を持つユダヤ人。神様に仕える人。

→見て見ぬふりをした。関わりたくなかった。

サマリア人

・ユダヤ人から軽蔑され嫌われていた人。

サマリア人とユダヤ人は敵対関係にありました。（注を参照）

→旅人を見て憐れに思い、介抱した。

イエス様の問い 「だれがこの人の隣人になったと思うか」

イエス様は「だれが隣人ですか」とは聞いていません。「だれが隣人になったと思うか」と問うています。

この人は私の隣人だから愛する。この人は私の隣人ではないから愛さなくてもよいのだ、などと勝手な区別をしてはならないのです。

誰が隣人なのかが問題ではなく、助けを必要としている人の隣人に、あなたがなりなさい、あなたも行って同じようにしなさいとイエス様はおっしゃっています。

## 3. そんなことができるの？

もし、あなたの嫌いな人が助けを必要としていたら、その人のことを心から心配したり、助けてあげることができますか。

私たちには難しいことです。でもイエス様は、私たちのそのような罪を、よくご存じです。

イエス様は私たちのこの罪を背負って十字架におかかりになり、罪を滅ぼし、よみがえられました。十字架の上でイエス様は、御自分をのしる人たちのために祈られました。このお方だけが本当の意味で人を愛することができるのです。

イエス様の愛をいただくときに私たちは初めて、関わらないようにと道の向こう側を通るのではなく、憐れみの心を持って近づくことができます。

あなたの助けの手を必要としている人が、あなたの周りにいるはずです。イエス様はそのためにあなたを、その人の近くにおいてくださっているのです。

「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」

（ヨハネの手紙一 4章19節）

（注）サマリアは北王国イスラエルの首都。紀元前722年、アッシリア王国によって陥落。イスラエルの指導者たちはアッシリアに捕囚として連れて行かれ、また外国から多くの人々がサマリアに移住した。この結果、異教の宗教が持ち込まれ、偶像礼拝も強いられ、その後、雑婚も行われるようになった。そのため純粋なユダヤ人たちはサマリア人と交際せず、蔑視するようになった。サマリア人たちは彼ら自身の礼拝する聖所、祭司職、宗教的儀式を作り出した。

## 4. 寸劇（台本は次ページ）

**配役** 旅人、強盗、祭司、レビ人、サマリア人、宿屋の主人、ナレーター（できれば小道具も用意する）台本を見ながら簡単な動作をつけて演じる。

## 〈善きサマリア人の劇〉

(※漢字が読めない場合はルビをふるとよい)

**ナレーター** ここはエルサレムからエリコに下る道です。なんか、こわそうな道です。旅人は帰りの道を急いでいました。

**旅人** ああ、おそくなってしまったなあ。急いで家に帰ろう。(強盗登場)

**強盗** ヤイヤイヤイ！ ちょっと待ちな！

**旅人** わあ～！ おまえたちはだれだ？

**強盗** 見てわからねえか！ おれは強盗だ。さあさあ、その荷物をだまってみなおいていきな。(紙の棒などでなぐる)

**旅人** 痛い、痛い！ やめてくれ！ たすけてー……、ううう……。 (旅人、倒れる)

**ナレーター** ああ、たいへんです。旅人は強盗におそわれてしまいました。誰か助けてあげないと死んでしまいます。だれか通らないでしょうか。あっ、向こうから祭司がやってきました。神様のお仕事をする人です。

**祭司** おや！ 人が倒れている。どうしたんだろう。強盗におそわれたんだろうか。でも、これからお仕事だし、時間もないなあ。服もよごれたら困るからなあ。だれかまた助けてくれる人がいるだろう。悪いが、このまま通り過ぎよう。

**ナレーター** あれあれ。祭司は行ってしまいました。早く助けてあげないと、旅人は死んでしまうかもしれないのに……。あっ、まただれか来ます。レビびとのようです。神様のために働いている人ですから、きっと助けてくれるでしょう。

**レビ人** 「自分自身を愛するように、他の人を愛しなさい」

そうだ、そうだ。そのとおり。

ここらへんはぶっそうな道だから早く行かなければ。こわい、こわい。

あれっ！ あんなどころに人が倒れているじゃないか。かわいそうに。きっと強盗にやられたんだろう。助けてやらないとだめかな……。いや、もしかして近くにまだ強盗がいるかもしれない。早く行かないと、こっちまであぶないぞ。しらんぷり、しらんぷり。

**旅人** う～ん……。たすけて～。

**ナレーター** あれあれ、レビびとは行ってしまい

ました。もうすぐ暗くなります。早く助けてあげないとたいへんです。あっ！ まただれか来ました。あれはサマリアびとです。みんながきらっている、サマリアびとです。サマリアびとと旅人のユダヤ人はとてもなかが悪いんです。また通り過ぎていくのでしょうか？

**サマリア人** もうすぐ暗くなるなあ。急がないと。あれっ！ あんなどころに人が倒れている。(すぐかけ寄り)

ど、どうしたんですか？ あれあれ、こんなにひどいケガをして……。

ひどいなあ！ きっと強盗にやられたんだ。

しっかりするんですよ！ (手当をする)

よっころしょ！（抱きかかえる）さあ、早く、近くの町へ急ごう！

**ナレーター** サマリアびとは、旅人を近くの宿屋に連れて行きました。

そして、きずの手当を宿屋の主人にたのみました。

**サマリア人** ところでおかみさん、私は明日の朝早く出かけなければなりません。

すみませんがこの人が元気になるまで、めんどろみてもらえませんか。

**宿屋の主人** いいですよ。安心していってらっしゃい。

**サマリア人** それはよかった。(お金を取り出す) とりあえず、これだけ払っておきます。もし足りないようだったら、帰りにまた払いますからね。よろしく願います。

**旅人** こんなにもよくしていただいて。なんておれいを言ったらよいか……。私たちユダヤ人は、あなたがたサマリアびとにいじわるをしたり、ひどいことをしてきたのに……。それなのにあなたはユダヤ人の私を見捨てないで、親切にしてくださいました。私の命をも助けてくださいました。

**サマリア人** 神様が喜んでくださることをしただけです。早くよくなって下さいね。

**旅人** はい、本当にありがとうございます。

**ナレーター** さて、この旅人のとなりびとになった人は、だれだったのでしょうか。

旅人のてきであったサマリアびとでした。

「あなたも行って同じようにしなさい」とイエスは語っておられます。

## 〈今日のカテキズム〉

※参照カテキズムとして子どもカテキズム問4が挙げられています。

問4 私たちの神さまが私たちに望んでおられることは何ですか。

答 神さまを愛すること、家族やお友だちを愛することです。

※十戒の要約を次の問答で確認してみましょう。

## ウェストミンスター小教理問答

問42 十戒の要約は何ですか。

答 十戒の要約は、心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なる私たちの神を愛すること、また自分を愛するように私たちの隣人を愛することです。

※これを言えた「律法の専門家」は「では、わたしの隣人とはだれですか」と質問しました。追いはぎに襲われた人は、三人にとって「家族やお友だち」ではなく、知らない人だっと思えます。知らない人、さらには敵でさえも愛せよとイエスさまは教えられます。

※追いはぎに襲われた人は半殺しにされたとあります。放っておけば死んでしまう状態でした。見殺しも殺しかもしれません。自分で手をかけて殺さなければ「殺してはならない」という戒めを守っていることになるのかどうか、次のカテキズムを見ながら、一緒に考えてみましょう。

## ハイデルベルク信仰問答

問107 しかし、わたしたちが自分の隣人を そのようにして殺さなければ、それで十分なのですか。

答 いいえ。  
神はそこにおいて、ねたみ、憎しみ、怒りを断罪しておられるのですから、この方がわたしたちに求めておられるのは、わたしたちが自分の隣人を自分自身のように愛し、忍耐、平和、寛容、慈愛、親切を示し、

その人への危害をできうる限り防ぎ、わたしたちの敵に対してさえ善を行う、ということなのです。

## ジュネーヴ教会信仰問答

問197 殺人を犯しさえしなければ差し支えないのですか。

答 決してそうではありません。すなわち、ここで語りたいものは神でありますから、単に外的な行ないに律法を課するだけでなく、さらに心の感情に対しても、むしろ特に後者にたいして課せられるからであります。

問198 いわば「隠された殺人」とでも言うべき種類のものがあることを暗に言われ、それについて神がここで私たちの注意を喚起しておられるとあなたは見ているわけですね。

答 その通りであります。すなわち、憤りや憎しみ、そして何らかの害を与えようとする欲望は、神の前に殺人と看做されるのであります。

問199 憎しみを少しも抱きさえしなければ、私たちがこの戒めを十分果たしたことになるのですか。

答 決してそうではないのです。というのは、主なる神は憎しみを罪として審き、隣り人を傷つける如何なる悪も禁じたもう時、同時に、私たちにすべての人を心から愛し、誠実に彼らを守り・保護する努力を要求しておられるのを示したもうからです。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日	ヨハネー3：16
月曜日	マタイ7：12
火曜日	ルカ6：36
水曜日	ローマ12：10
木曜日	コロサイ3：12
金曜日	ペトロ一3：8
土曜日	マタイ5：44～45